

ひがしひろしま 郷土史研究会ニュース

No.587

2023年7月

「創立50周年記念事業」準備始動 会長 赤木 達男

新たな飛躍に向けた胎動の年とされる「癸卯（みづのとう）」の本年もはや半年を経ました。来年、当協会は「創立50周年」を迎えます。市政施行とはほぼ同時に産声を上げ、刻んだ半世紀にわたる活動は大きく二つに分けられます。一つは、「東広島市の史跡・文化財を見て歩く会」や「郷土史展」など、広く市民の方々に郷土の歴史や文化を知っていただく活動です。二つには、例会や臨地研修、各研究グループによる活動、『郷土史研究会ニュース』発行や研究成果をまとめた刊行物出版などの研究活動です。

この対外活動と内部活動を両輪に重ねられた50年の歩みは、会員はもとより市民の皆さまとの共同で紡がれた歴史であり、共有の財産です。

一人ひとりの活動を軸に連綿として継がれてきた東広島郷土史研究会の財産と良き伝統を次代につなぎ、さらなる発展を期すために、6月24日、「創立50周年記念事業」第1回実行委員会を開催し、諸準備に着手しました。

「50周年記念事業」の内容

記念事業の内容は、(1) 令和6年度(2024)の事業のすべてに「創立50周年記念」の冠を付して実施する。(2) 「40周年」から10年間の歩みを、写真を中心に簡潔にまとめる(記念小冊子)。『郷土史研究会ニュース』創刊号(1974年8月)から最新号までをCDに収録した電子縮刷版(仮称)を作成する。(3) 「広島県史研究協議会・東広島大会」(2024年11月9日予定)を「創立50周年記念事業」の大きな柱に位置づける。この3つを柱に取り組みすることとし、詳細は実行委員会で協議します。その都度、会員の皆様にはニュースなどでご報告します。

「オール郷土史」で裾野広く

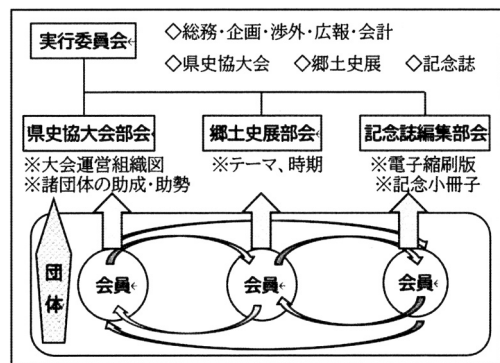
10年前の「創立40周年記念事業」では、「会

員みんなが参加できる事業にし」、「内部の研修を一層深める機会にしよう」という目標のもと取り組まれました。

今「50周年記念事業」では、「みんなが参加でき、多くの人たちと結び合い、新たなステージへのスタートとなる事業」を目標に掲げたいと思います。具体的には、理事会と会長経験者を実行委員会の役員とし、会員全員が実行委員として参画していただく、「オール郷土史」で臨みたいと思います。

また、市民や諸団体の皆さんに参画・助勢いただける取り組みを追求し、活動の裾野を広げ新たな会員の獲得に繋がりたいと思います。実行委員会の下に①県史協大会部会、②郷土史展部会、③記念誌編集部会の部会を設置。部会を中心に各記念事業および「歩く会」などの通年事業の準備及び運営を進めることとします。

下図は実行委員会と作業部会、会員や諸団体との相関図です。



市内各町郷土史研究会との交流・連携

来年「市政施行50周年」を迎える東広島市は市史編さん作業を進めておられ、当協会も黒瀬、福富、河内、安芸津など市内各町の郷土史研究会の皆さんとともに編さん委員会に加わっています。

当協会の「創立50周年記念事業」についても、各郷土史研究会の皆様のお力をいただき進めたいと考えています。そして、引き続き交流・連携を深めながら、各地域の歴史や文化を学び伝承し、わがまち東広島の発展にお役に立てる郷土史研究活動へと歩を進めてゆきたいと考えています。

最後にあらためて、会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

7月例会のご案内	
日時	7月22日(土) 13:30～
場所	三ツ城地域センター (旧下見福社会館)
研究発表	「竹内家と竹内家文書」 天野浩一郎氏

6月例会報告

忘れられた文化を伝える
白市俳諧史跡

6月例会は6月24日(土)午後1時半から東西条地域センターで開催され、27人が参加して行われた。冒頭、赤木会長が「今は節目の時代と言われる。歴史という分野も新たな発見が多くあり、これから先にロマンあることにたどり着く可能性が広がっている。東広島郷土史研究会でも創立50周年記念事業に向けて実行委員会が始動した。オール郷土史で挑みましょう」と挨拶した。

今回の発表は浮田一民氏が『白市に残る俳諧史跡』というテーマで行い、「俳諧」にスポットを当て、新たな視点からの歴史を紐解いた。

俳諧とは、連歌と呼ばれる貴族の遊びが変化したもの。一首の短歌を上上の句と下の句に分けて二人以上で詠み合い、それをどんどん続けていく。ただ、連歌は使える言葉などが限られていて、参加できる人が限定されていた。その制約を緩め、庶民でも楽しめるようにしたものが俳諧である。室町時代から流行したが、松尾芭蕉が単独でも鑑賞できる自立性の発句(俳諧の最初の5・7・5の17音)を数多く詠んだことが元になり、明治時代に正岡子規が俳諧から発句を独立させた俳句を成立させたことで、個人の創作性を重視した俳句が主流となっていく。

浮田氏が紹介したのは、白市にある2つの俳諧に関連した史跡、「鶯塚」と「奉納俳諧額」である。狭い地域に複数の俳諧関連史跡が残っているのは珍しいことだという。

「鶯塚」は光政寺から白山城跡へ向け少し登ったところにある。「鶯塚」にその由緒は書かれていないが、俳書「ひさこ苗」に「鶯塚」に関する記述が見られ、それをもとに建立の経緯を明らかにし、その内容が詳細に説明された。風律という俳人の十三回忌追善供養碑として建てられたもので、鶯で始まる句が選ばれたことにちなみ鶯塚と名付けられたということである。

「奉納俳諧額」は光政寺にあるもので、もとも内容的にはあまり価値のないものと考えられていた。しかし、浮田氏の調査により、白市の旧跡の情景を詠んだ俳諧であると判明した。この俳諧額は県内に残る俳諧額の中で最も古いものでもあることから、貴重な史料として保存が期待される。

とはいえ、現在、光政寺は管理者不在で建物も俳諧額も劣化が進んでいる。浮田氏からは、文化財の保護には所有者からの申請が必要であ

り、現在は手立てが講じられない状況であることが説明された。

浮田氏自身が「俳諧の話ができる人がいない」というほど、注目される機会が少ない俳諧史跡である。今回の発表で、白市だけでなく黒瀬や安芸津にも俳諧額があるという情報も紹介されたことをきっかけに、多くの人が俳諧史跡を訪れ、注目度が高まり、保存につながることを期待する。

<例会参加者(敬称略)>

赤木達男、藤原美春、浮田一民、三島昇、船越雄治、間瀬忍、近藤英治、国永昭二、蔵楽知昭、堀内幸子、今田幸博、國松宏史、木原敏博、光田清志、丸本富美子、中村建治、上野洋司、宍戸元文、菅野晃行、天野浩一郎、西本嘉住、福村博士、森沢光男、蔵楽恭子、西谷勝彦、大森美寿枝、重竹訓江(以上27名)

5月例会発表要旨

東広島の六地藏

船越 雄治

令和5年度に入り最初となる5月例会(5月27日)、「東広島の六地藏」というタイトルで8組の六地藏を紹介しました。その詳細は6月号の郷土史ニュースの冒頭で紹介してもらっています。5月例会に出席できなかった会員でもニュースを読んでくだされば概略は判ります。そこで、欠席された会員向けの話をしてします。

六地藏を知るためには、まず六道の概念を知る必要があります。広辞苑には「六道とは衆生が生前の善悪の業によっておもむき住む六つの迷界のこと。すなわち、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天道がある」と書いてあります。次に知るべきことは六地藏ですが、広辞苑では「六道において衆生の苦患を救うという六種の地藏菩薩のことである」と書いてあります。従って、当初より6種を意識して同一期に6体を揃えて造作して初めて六地藏と言えるのです。趣旨も仕様も造作年月も異なる単体の地藏を6体拾い集めて1箇所安置しても六地藏には該当しません。ある町史ではこのような6体の地藏を六地藏としてカラー写真を添えて紹介している例がありますが残念です。

例会での発表を終えて1週間後のこと30年前の出来事を思い出しました。現役のサラリーマンだった頃、ある葬式に参列しました。棺の蓋が閉じられる直前、親族と思われるお婆さんが「良いところへ連れて行ってもらいなさいヨ」と叫びました。その時はその意味を考えることもなかったのですが、六地藏の調査、研究、発表を終えた今、改めて考えてみると、短い叫び

の中には

1. 死後に行く迷界には良いところと悪いところがある。
2. 悪いところへ行っても良いところへ救い上げてくれる仏がいる。

の2つのことが含まれています。六道も六地藏も知っていたからあの言葉が出たのでしょう。

次に思いついたのは自分のことです。自分の人生を振り返って考えると畜生道に行くしかありません。救ってくださるのは宝印地藏です。従って無数にある単体の地藏尊ではなく、六地藏のうちの宝印地藏にお参りすることにします。

六道については辞典等に短い説明文はあっても今ひとつイメージがわかりません。せめてイラストや絵があればいいのと思っていたところ、1ヶ所良い例を見つけました。安芸津町大田地区の生坂峠にある首無地藏堂です。



首無地藏堂の絵馬

軒の下に掲げられている絵馬は風化が進んでいるうえ暗いので判然とはしないのですが、描かれているのは地獄道です。右上に閻魔大王、右下に釜茹でされる人、左上には救ってくださる壇陀地藏が描かれています。現地で現物を見たい人はLEDの照明を持参することをお奨めします。

例会での発表後9組目が見つかりました。この調子でゆくと10例目があるかも知れません。ご存知の方はご一報ください。

令和5年度春の隣地研修

ジャパンレッドを訪ねて ～岡山県高梁市吹屋の旅～

間瀬 忍

春の隣地研修は5月25日(木)に開催され、16人が参加。予定通り、午前7時に芸陽バス本社を出発しました。目的地は岡山県高梁市。天気予報によると、雨の心配はなさそうでしたが、出発時には怪しげな空模様で、不安になり、お

守り代わりに傘を持って行ってみました。これが効いたのか結局最後まで雨は降りませんでした。



高速道路を降りて最初に到着したのは、高梁市観光駐車場。午前中はここを拠点に自由散策です。高梁市は鎌倉時代から明治維新まで長きにわたって城下町として栄えた町。駐車場の徒歩圏内にも、頼久寺、武家屋敷など、当時の面影を残す建物や小路が多くありました。

頼久寺は小堀遠州作の庭園があることで有名で、庭園は国指定の名勝にも指定されています。蓬莱式枯山水で愛宕山を借景し、中央に鶴島、その奥に亀島があり、さつきの植え込みで大波を表現しているとのこと。さつきもちょうど咲いていて、美しいお庭でした。



散策を終えて駐車場で出発を待っていると、高瀬舟が展示されているのを発見。高瀬舟は浅瀬でも漕げるように底を平たくした川舟のことですが、高梁市では400年にわたって交通の主役だったそうです。中に入ってみるとかなり大きい。この舟をどうやって漕いでいたのか。見てみたい気がしました。

昼食は「朝日堂」でいただきました。このお店は安くてボリューム満点の料理をいただける有名店。5杯までお代わり無料。しかも、4杯目はカルビ丼、5杯目はうな丼という大盤振る舞い。それにも関わらず、誰もお代わりできませんでした。残念。

午後からは、いよいよ、ベンガラの街、吹屋の観光です。

ベンガラとは酸化第二鉄を主成分とする顔料

で、染料だけでなく、食料や化粧品の材料などにも使われています。独特な赤い色で、海外ではジャパンレッドと呼ばれていました。その理由は、有田焼や伊万里焼などに使われ、他にない赤だったからです。特に柿右衛門の赤は有名で、世界を魅了する美しさでした。磁器は高温で焼成するため、焼成後に赤い色は残らないのが一般的。それにも関わらず、吹屋で作られたベンガラを使うと美しい赤が発色する。職人はこぞって吹屋のベンガラを使っていたそうです。吹屋での丁寧な仕事が日本の魅力を生み出したのですね。

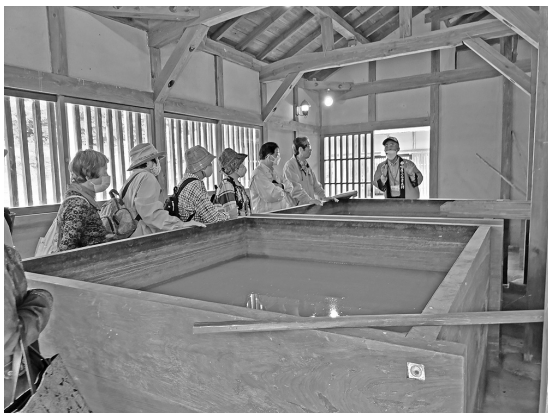
観光は、広兼邸→ベンガラ館→旧片山家住宅→旧吹屋小学校の順に巡りました。

広兼邸

城郭を思わせるような邸宅。特に石垣の迫力はすばらしい。広兼氏は庄屋で、小泉銅山とローハ（ベンガラの原料）の製造で巨大な富を築いた。

ベンガラ館

ベンガラの工場を再現した施設。焼成したベンガラの基を水洗いして不純物を取り除く→石臼で粒子を小さくする→酸を取り除く→天日干しする、という当時の製法を見学できる。



酸を抜くための水槽

旧片山家住宅（国重要文化財）

近世弁柄商家の典型的な建物。片山家は200年余りにわたって吹屋弁柄の製造販売を手掛けた老舗。

旧吹屋小学校（岡山県重要文化財）

明治時代に建築された木造の小学校。3棟が現存しており、西館と東館は明治33年、本館は明治42年に竣工している。平成24年3月まで国内最古の現役木造校舎とされていた。

印象に残ったことを紹介します。広兼邸と旧片山家住宅には、どちらの家にも隠し部屋があります。泥棒にわからないように、階段がない部屋を作ったり、階段を隠したり。今の時代で

は、災害が起こったら逃げられないのではないかと不安になりますが、当時は災害より泥棒に備えることが重要だったのですね。

また、旧吹屋小学校はとにかく綺麗に掃除をしてありました。スタッフの方が毎日朝から磨いているそうです。木の良さを引き出すための、日本人の長年の知恵が受け継がれているのだと感じました。

丁寧な仕事でジャパンレッドを生み出し、丁寧な掃除で木の力を引き出す。地道に努力することで独自性を作り出してきた日本の姿を垣間見たような気がしました。

第65回山城探訪会

吉田 泰義

河内町中河内の沼田川沿いを4回探訪

- | |
|--|
| ① 3月28日(火) 9時30分～13時
5人で藤ヶ城跡へ北西より往復しコース下見 |
| ② 4月26日(水) 14時～16時
一人で藤ヶ城跡へ北東より縦走しコース下見 |
| ③ 5月8日(月) 9時30分～14時30分
4人で杉森神社や大道の古道などコース下見 |
| ④ 5月20日(土) 9時30分～14時30分
11人で杉森神社や岩戸別神社など探訪会 |

①回目コース下見は、鉄南団地の西から地元の人に教えられた山道を登った。急傾斜と落ち葉で足が滑りやすく、落ち葉を掃いたり目障りな小枝を切ったりし途中休憩しながら約1時間で登った。

山頂真下の堀切から本丸に登ると細長い郭で、中央に石座があり一休みした後、持参した巻尺で広さを計測、わずかの交差はあったが、幅は約10m～南が約20m、長さは約44mと南北に長くて、北側の下に郭や大岩が見受けられ、木が伐採されたら中河内が一望でき見張りには最適である。

②回目コース下見は、東側の津谷川沿いを登り、石が散乱していて危ないが急傾斜でないのでゆっくり周囲を観察しながら登り、山頂近くに石垣が崩れたような様子も見受けられた。

山頂付近の尾根から前回上から眺めた大岩に到着し一休みし本丸へ枝に掴まりながら到達した。

2回のコース下見で、藤ヶ城は中河内と善入寺（本郷町）に連なる山で、西南は入野竹林寺に繋がり三角地域の境目、戦国時代には沼田川

を挟んで北を監視していた山城であったと推定できた。

中河内（なかごうち）3城の概略

	山城跡	地域	標高m	比高m
1	大道城	大道	170	40
2	茶臼城	西条	200	70
3	藤ヶ城	鉄南	239	120

③回目コース下見は、沼田川沿いの杉森神社や大道に残っている半世紀前までの古道など歩いた。

大道（だいどう）は沼田川に合流した中河内の西に位置、麓に南北に古道や東には立栄寺跡、南北に山を越えると小田地区に古道が通じている。

南から古道を歩いたが途中通行止めで引き返し、車で北に移動し再び古道を歩き廃五塔寺を探したが見つからず、戊辰戦争や西南戦争に志願し戦った河内の神機隊士の墓に出会えて収穫はあった。

④回目の本番は河内支所に集合、河内駅前～椋梨川～能光橋～沼田川南～杉森神社～河内大橋～沼田川北～河内支所上の岩戸別神社へゴール。

杉森神社では拝殿に参拝し宮司より神社の歴史を聞かせて頂きみなさん熱心に聞き入った。



杉森神社



お猿さん

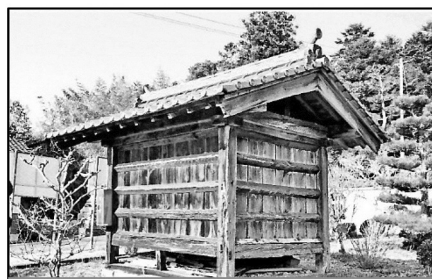
岩戸別神社

埋蔵文化財センター屋上に猿がいることはほとんど知られていない。岩戸別神社では町並を

眺めながら昼食のお弁当や歓談も楽しんで閉会した。

「志和 大宮神社-調査の記録」刊行 今田 幸博

志和 大宮神社は大同2年（807）勅願により坂上田村麻呂が創建したという。



東広島市指定重要文化財 大宮神社宮蔵

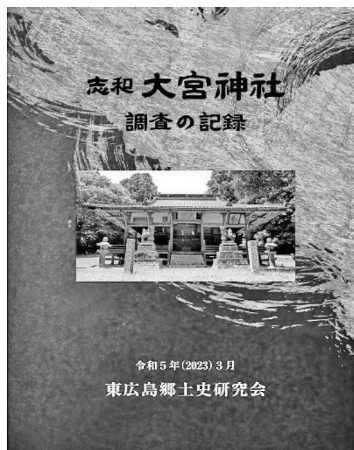
「芸藩通志」には“社に蔵する寄付の品、元亀（1570-73）、明徳（1390-94）大永（1521-28）年間の物多し”とあり、中世はもとより江戸時代には志和四か村（志和堀村、志和東村、志和西村、内村）の総鎮守として崇敬を集めた有力な神社である。東広島市指定重要文化財の「宮蔵」には、広島県指定重要文化財（紙本墨書大般若経583帖）・東広島市指定重要文化財（五部大乘経1具）の他、数多くの奉納品などが残されているが、これまで総合的に調査された記録は無かった。

東広島郷土史研究会 志和会では貴重な文化財等を後世に伝えるため、平成30年（2018）2月から調査を開始し、この度「志和 大宮神社調査の記録」として刊行の運びとなった。

調査対象物は上記2点の重要文化財を初め、宮蔵内の木箱などに収納されている「東広島市指定重要文化財 懸仏8面」、神道の祭祀に用いる神具「金幣」、祭禮に用いた纏（まとい）、装束（しょうぞく）、獅子頭、雨乞いの願いが叶い願掛けを解く儀式に用いた「雨乞い願解幟」（がんかいのぼり）、神社や寺が発行する厄除けの護符の版木「牛王寶印」（ごおうほういん）、二の鳥居に掲げられていた扁額「八幡宮」などの他に、堂宇造立・祈祷 お祓いに関する「棟札」17枚等一点、一点の墨書書きを読み解いた。また、神社拝殿に掲げられている「絵馬」22枚、境内の鳥居、注連柱、石燈籠、狛犬、水盤、石碑、縦馬場・横馬場と棧敷などの石造物を紹介・解説している。

最後に、東広島市無形文化財「吹きはやし」を紹介している。室町時代の天文年間（1532-55）頃から大宮神社の例祭に当たり、年々天皇の代

理として京都の吉田家より奉幣使（ほうへいし）※神社に幣帛（へいはく）〈布帛 衣類などを捧げる使者〉を迎える儀式があったが廃絶したため、この儀式を後世に伝えるため、奉幣使に擬して「後使」の儀式を行っていたが江戸末期頃に廃退し、式の一部が変化した「吹きはやし」だけが残り現在に受け継がれている。当時の懐かしい写真やDVDも残されており、昨年11月に開催された「郷土史展」では当時の参加者や保護者が懐かしく見入っておられた。



「志和 大宮神社-調査の記録」は、オールカラー82 ページ。酒蔵通り“観光案内所”で格安の1,000円で販売しています。また、毎月の例会でも販売しています。

[お問い合わせ] 吉本正就 TEL 082-433-3825

《《新規会員募集中！》》

郷土史研究会では新規会員を随時募集しています。東広島の歴史を辿ってみませんか。

活動の様子がお知りになりたい方はQRコードを読み取ってのぞいて見てね。

郷土史研究会ニュースもあるよ！



HP



Instagram



Facebook

【郷土史研究会ニュース原稿募集のお知らせ】

郷土史研究会ニュースの原稿を募集しています。最近、興味深い情報を入手した方、長い間調査していることを発表したい方、今まで一度も原稿を書いたことがないけどやってみようかなと思った方など、会員ならどなたでも構いません。原稿の長さも長くても短くても大丈夫です。パソコンが苦手な方は手書き原稿でOKです。あなたの原稿をお待ちしております。

お詫びと訂正

6月号の内容に誤りがありました。お詫びして訂正させていただきます。

5ページ天野氏の記事、本文8行目「11代当主竹内努（つとむ：兵右衛門改め）」⇒「亮左衛門（元割庄屋）の3男・竹内務（つとむ）」

グループ研究会ご案内

第277回 古文書研究会

と き 7月18日(火) 13:30～
ところ 市役所北館 市民協働センター
テキスト 「教訓道しるべ」③

第176回 石造物研究会

と き 7月25日(火) 9:30～
ところ 市役所北館 市民協働センター

第177回 四日市町並研究会

と き 7月10日(月) 13:30～
ところ 歴史広場 吟古館

山城探訪会

7月、8月はお休みします。

原爆資料保存研究会

と き 7月20日(木) 14:30～
ところ 市役所北館 市民協働センター

7月の図書室開放

と き 7月21日(金) 13:00～15:00
ところ 高屋教育集会所

ひがしひろしま郷土史研究会ニュース 第587号

令和5年(2023)7月5日発行
編集・発行 東広島郷土史研究会

会 長 赤木達男 TEL(082)423-7235

E-mail:akataatu@d4.dion.ne.jp

事務局長 國松宏史 TEL090-7979-6234

E-mail:kunimatsu402@hi3.enjoy.ne.jp

会報編集 間瀬 忍 TEL080-5756-2303

E-mail:mase shinobu@yahoo.co.jp